

「脳科学者の母が認知症になる」 著者：恩蔵絢子（おんぞうあやこ）

本書では、筆者が認知症の母親と2年半の間、脳科学者として冷静に分析しするところもあれば、生活を共にするからこそ、これまでの母親と異なる不可解な行動への理解や、これまでと変わらぬ感情表現等細かい部分が書かれているなど、人間らしさを感じ、共感する部分もありました。

それは、病気に向き合う医師のように第三者的な視点ではなく、母親と娘が共に生活し、認知症と向き合う中での脳科学者としての視点だからこそ、気づくことが多いと思います。

筆者が「初めに」で考察を述べている部分について抜粋します。

『次第に記憶を失っていく母を記録する。それは「様々なことができなくなっていく」という事実直面することでありながら、「母に残っているものは何か」を発見する過程でもあった。そして、何ができる／できないという視点で母を見ると、母が母でなくなっていくようで怖かった。だが母の反応の中には、まだ変わらぬ母の姿もあった。やがて私は、「母らしさ」とは何かついて考えることになる。つまりこういう問いだ。人は、以前にできてきたことができなくなったとしたら、それは「その人らしさ」を失うことになるのだろうか？ その人の記憶こそが、はたして「その人らしさ」をつくっているのだろうか？ 私は、脳の働きの中でも特に、感情を専門に研究してきた。それが認知症が「その人らしさ」に与える影響について思わぬ考察をもたらす結果となった。認知症は非常にゆっくりと進行する。失う過程がゆっくりであるからこそ、人の変化を意識することができ、またその変化に慣れる時間や、考える時間がたくさんあった。』

としています。

そして、本人に情報を伝えることを工夫し、うまく情報が伝われば、いままでと同じ感情の反応が引き出せることも可能であるとしています。認知症でも体の反応や感情の部分は、最後まで残りやすいとされています。

夫や子供に対する愛情表現も、本人にちゃんと情報が伝われば、引き出せることが可能です。その部分に「その人らしさ」がみられるのではと思います。

本書は、脳科学者として、認知症の方の脳をつかさどる各部分の障害により、その人の不可解な言動、行動、症状分析も参考になりますが、やはり自分の母親をよく知っている娘だからこそ、その接し方に応じて、母親らしらを見出し、感じることもできたのだと思います。

第三者的な分析や考察でなく、当事者として書かれている点で、参考になる書籍であると思います。

令和2年7月